

(別紙の2)

自己評価及び外部評価票

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己 外部	項 目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)		
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている。	地域に密着したサービスを提供するという理念を踏まえ、毎月開催している職員会議の冒頭で理念を確認、共有し、実践につなげている。	毎月の職員会にて、交代制で理念を読み上げ全員で確認合っています。日々の介護の中で気になる事を話し合い、理念に沿った介護ができていないかを振り返っています。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している。	地域の人達とは開所以来深い付き合いをさせていただいており、日々の生活において交流をしている。しかしながらコロナ感染症の拡大防止の観点から、諸行事を縮小し、住民の招待は行っていない。	近所の方が、わたの家の畑に野菜を植えてくれたり季節の野菜を届けてくれています。以前のように、近所の方と外で焼肉などをやりたい思いはありますが、感染症への不安と利用者の重度化のため実現困難になっています。近くの保育園児が散歩の途中に寄ってくれています。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている。	研修会や実践から得た知識をもとに、認知症の人を抱える家族や、地域の人達からの相談に応じている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、その意見をサービス向上に活かしている。	委員は地域包括支援センターの職員、特養の所長、民生児童委員等それぞれの立場で活躍されている方々で、専門的な意見や助言をいただいております。サービスの向上に活かしている。	偶数月に開催し、利用者の様子や身体拘束研修について報告しています。災害時に周囲にも知らせるように、非常ベルを外につけたらとのご意見をいただき実現できました。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる。	飯田市長寿支援課や自治振興センターの方々には、常に指導や助言をいただいている。平成31年から地域内の福祉事業所で立ち上げた遠山福祉会に参加し、地域の声を聴くなど情報交換を行っている。	制度についての質問や困った事など日常的に電話連絡を取っています。自治振興センターの所長も訪問してくれます。地域の介護事業所や専門職の人たちと立ち上げた勉強会に参加し、情報交換を行っています。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	毎月開催している職員会において、身体拘束をしないケアの具体的な行為について取り組んでいる。また、研修会や実践から得た知識をもとに、認知症の人を抱える家族や地域の人達からの相談に応じている。	毎月の職員会で身体拘束や虐待について、具体的事例の資料を基に話し合っています。運営推進会議にもその研修の報告をしています。8月の職員会では、新聞報道にあった食事介助の仕方について話し合いました。声かけを含め日々の介護を振り返るようにしています。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている。	毎月開催している職員会において、身体拘束をしないケアと、虐待に繋がる恐れがある事項について学習し、徹底して虐待防止に努めている。		

自己	外部	項 目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している。	介護サービス事業の実施にあたり、権利擁護は重要課題としてマニュアルを活用し学んでおり、その人らしい生活を送っていただけるよう支援している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている。	契約締結時においては、契約書の内容と重要事項説明書について丁寧に説明し、入居者や家族の理解を得られるよう努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている。	以前は、家族の来訪時に入居者の生活状況の他家族の要望等を伺っていたが、コロナ禍の現在は遠のいているため、毎月のお便りで近況をお知らせしている。家族には定期的にアンケートを実施し、要望等を把握している。	毎月写真入りのお便りを家族に送り、わたの家の様子をお知らせしています。面会時や電話などでも意見を聞くようにしています。毎年看取りに関する意向伺いのアンケートを郵送し、その中で要望をお聞きしています。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている。	毎月の職員会において、運営面等について話し合う機会を設けており、職員の働く意欲と利用者の生活の質の向上に努めている。	職員は子育てしながら働ける環境が用意されており、利用者を含め、家族のような場所だと感じています。意見があれば直接管理者や法人理事長に伝えられる職場環境です。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	介護職員処遇改善事業により、給与水準の引き上げに積極的に取り組んでいる。また、休憩室を設置し、十分な休憩が取れるよう取り組んでいる。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている。	オンライン会議システムを活用し、職員一人ひとりが学びたいテーマを選び、それに沿った研修へ参加できるよう、インターネット等の環境を整え、実行している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている。	コロナ禍だけではなく、当事業所は山間僻地の上、他事業所と遠隔地にあるため交流は容易ではないが、研修会等の機会に交流できるよう取り組んでいる。		

自己	外部	項 目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている。	入居者本人の思いを大切にするため真摯な気持ちで向き合い、信頼関係を築くことを心掛けています。特に入居初期は馴染みが薄く孤立気味なので、アセスメントをしっかり行い本人の安心を確保している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている。	入居時に、家族から困っていることや不安に感じていること、どのような介護を望んでいるかを伺い、介護プランに反映し、安心と信頼関係を築くことを心掛けています。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている。	本人や家族がどのような思いで、どのような介護を望んでいるかを明確にし、ケアプランを作成してサービス提供を実施している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている。	入居者と職員は、一つ屋根の下で暮らす家族という気持ちで生活しており、暮らしを共にする者同士として、明るく家庭的な関わりとその人らしい生活が送れるよう努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている。	本人と家族、それに職員が互いに連絡を密にし、ともに支え合っていくという関係を築いている。また、毎月「わだの家通信」を作成し、行事や生活の様子をお知らせしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている。	コロナ禍の現状において容易ではないが、本人にとって大事な場所、馴染みの人達や場所の関係を深める支援を実施している。また家族との面会は、ガラス越しではあるが対応している。	利用者が重度化しているため、馴染みの場所への外出が難しくなっており、以前はできていた墓参り等も出来なくなっています。親戚や知人が顔を見にきてくれています。散歩の折に近隣の方とお話しています。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。	多人数でできるゲームや体操をしたり、散歩や外気浴、野外での食事など、利用者同士が関わり合い支え合う環境づくりに、積極的に取り組んでいる。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている。	亡くなられた方の命日には、事情が許せばお墓参りを行っている。また、電話で話す機会を作ったりして関わりを断ち切らないよう努めている。		

自己 外部	項 目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント				
23	(9) ○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している。	利用者の高齢化により、意向どおりには行かない面が多くなってきているものの、一人ひとりの生活歴を把握し、趣味や大切にしていることなどを家族や記録から掘り起こし、その人の思いを大切に支援を心掛けている。	生活の中での会話や表情、しぐさなどから意向を把握するように努めています。またお元気な頃からの利用者が多いので、利用者の思いや好み、希望などは以前の様子から考えるようにしています。	
24	○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている。	自分らしく生活していただくために、生活歴、馴染みの暮らし方、生活環境等を把握し、ケアプランの基礎にしている。		
25	○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている。	生活歴を把握した上で、一人ひとりの過ごし方や心身状態、本人ができることや持っている力を引き出すことに努めている。		
26	(10) ○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している。	ケアプランは、本人や家族、関係者の意向や意見を尊重し、日々の暮らしの記録を基にアセスメントとモニタリングを繰り返しながら、本人が快適で自分らしく生きることを重要課題としている。	介護計画を家族に説明し、家族の意向の欄は、自筆のサインをもらっています。日々の記録を担当職員がまとめて、介護計画作成者がモニタリングし、次の計画に生かしています。	
27	○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている。	いく種類がある記録の中で、個人別記録簿があり、日々の暮らしやケアの実践、気づきなどを記録しており、それらの情報を職員間で共有し、介護計画の見直しや日々の介護に活用している。		
28	○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	本人や家族の状況、ニーズに対応して臨機応変に幅広い支援を実施しており、柔軟で多様なサービスを心掛けている。		
29	○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している。	山に囲まれた谷間にあり、豊かな環境と周辺住民に見守られ、安全で安心した暮らしを楽しむことができている。		

自己	外部	項 目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	受診は、本人及び家族の意向を尊重し、適切な医療が受けられるよう支援している。また、協力病院との連携や訪問歯科診療により口腔ケアにも取り組み、適切な医療が受けられるよう支援している。	本人や家族の希望を聞きながら、内科は近くの診療所の往診を受け、専門の診療科は職員の付き添いで地区外に受診し、適切な医療が受けられています。歯科は2か月に1度、訪問歯科診療を受けています。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している。	県立阿南病院及び地元の診療所と契約し、診察及び往診により医療機関との連携が密になり、迅速かつ適切な医療が受けられる環境にある。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入退院については、契約看護師を介して病院と情報交換が密接に行われ、治療に専念できる環境づくりと共に、早期退院に努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる。	入居時に看取り指針(ターミナルケア)に基づいて説明を行い、早い時期から家族と終末期のあり方について話し合いを行い、方針と対応を共有している。また、重度化した場合を想定し、かかりつけ医の助言により家族との話し合いを実施している。	看取りまで行うようになって10年以上になります。入居時に重要事項説明書にて看取りまで可能な事を説明し、毎年家族に意向を伺うアンケートを送って思いを確認しています。終末期には家族との連絡を密にし、かかりつけ医、看護師とも連携を取りながら支援しています。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	かかりつけ医や契約看護師から急変事の指導を受け、定期的に応急手当や初期対応の訓練を行っている。また、救急搬送の時、情報の伝達がスムーズに行われるよう救急カードを活用している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている。	自然災害発生における業務継続計画(BCP)に基づき、利用者の安全を守るための知識を身につけると同時に、近隣住民と災害発生時の救援提携を強化し、非常時には1分以内に駆けつけることができることが、最大の力となっている。	業務継続計画(BCP)が作成され、備蓄品なども準備されています。昼間の時間帯に年2回の避難訓練を実施しています。災害時に駆けつけもらえるよう、近隣の住民と協定を結んでいます。	季節や天候、昼夜を問わず利用者が安全に避難できる方法を全職員が身につけるとともに、近隣だけでなく地域や行政、専門機関の協力を得られる体制を築いていかれることを期待します。

自己	外部	項 目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅳ. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている。	毎月の職員会において適切な声かけについて勉強し、その人らしい生活を支援すると共に、人権を尊重しプライバシーを損なうことがない対応に努めている。	排泄時の声かけで、その人が恥ずかしいと思う言葉は使わないようにし、さりげない言葉かけに努めています。毎月の職員会で声のかかけ方について確認し合い、気を付けるようにと話し合っています。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている。	日常生活を送る中で、本人の思いやしたいことを聞き、何を選択するのか本人の意思を確認する支援を行っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している。	一人ひとりの生き方や思い、ペースを優先し、その人らしい生活が送られるよう支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している。	その日に着る服を本人が選んだり、季節やその折々にあった身だしなみやおしゃれが楽しめるよう心掛けている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている。	最近、重度者が増え、四季折々の郷土料理を提供することも限られてきており、食事を楽しむことが大変少なくなっているのが実情である。一人ひとりの嗜好を把握し、食べやすい大きさ、柔らかさ、盛り付けなど食事に工夫している。	半数の方がミキサー食となり介助も必要になっています。四季折々の行事食には形態を工夫して提供し、季節を感じてもらえるように努めています。片付けなども手伝える方にはお願いしています。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている。	一人ひとりの食事量、水分摂取量を把握し、栄養バランスを考慮して楽しい食事になるよう心掛けている。また、非常勤管理栄養士の栄養指導を受けている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている。	訪問歯科診療により一人ひとりの口腔状態を把握し、指導により毎食後、歯磨きまたは口腔内の清潔支援を行っている。		

自己	外部	項 目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている。	全職員が、一人ひとりの排泄パターンを把握し、トイレ誘導を行っている。利用者の重度化においても、オムツに頼らない排泄の支援を行っている。	半数以上の方がおむつ使用となっており、時間に対応しています。おむつ以外の方には排泄チェック表をつけ、排泄のサインを把握し、時間でトイレ誘導を行っています。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる。	食事に配慮し、野菜等の繊維質の多い食材を使った料理を心掛けている。また、十分な水分補給と、できるだけ歩行を多くするなど運動を行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている。	できるだけ本人の希望に沿った入浴を心掛け、入浴剤や、季節には柚子などを入れ、楽しい時間になるよう配慮している。また、自力で入浴できない方のためリフト浴を整備している。	重度の利用者が多く、リフトを使用しての入浴を楽しんでいただけるよう入浴剤を利用し、季節によって、ゆずや菖蒲などを湯船に浮かべてゆっくり入ってもらっています。拒否がある場合は入浴日を翌日に変えたり、気をまぎらせて誘導するなど工夫しています。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している。	一人ひとりの生活習慣や活動状況、自然なリズムを把握し、その時の状況に応じた休息や、褥瘡防止に配慮しつつ気持ちよく睡眠できるように環境を整えている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている。	医師や看護師の指導により薬の効果や副作用等について理解し、飲み忘れや誤薬を防ぐ取り組みを行っている。また、本人の状態や経過等を医師へ情報提供し、治療に活かす取り組みを行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている。	洗濯物の量みや食材作り、買い物や掃除、生きがいを感じるなど、その人の生活歴や持てる力を活かす取り組みを行っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している。	コロナ禍においても、できるだけ本人の希望により行きたいところがあればいつでも出掛けることができる支援を行っている。しかしながら以前のように、花見など普段行くことがない場所へ出掛けたり、焼き肉など屋外食を楽しむことなど野外での行事が極端に減っている。	車いすの利用者が多くなり、車での外出は難しくなっています。天気の良い日の午前中に、ホームの周辺を車いすで散歩するなど、少しの時間でも外の空気を吸えるようにしています。	

自己	外部	項 目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	職員が付き添って近くのスーパーへ行き、自分で好きな買い物ができる支援を行っている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	手紙や年賀状を書いたり、家族や知人と電話ができるよう支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている。	地元産の木材を使用した、温もりや懐かしさが漂う住居で、玄関やホール等共用部はこの家にも共通するような居心地のよい空間となっている。また、玄関では季節の花を飾り、癒しの場ともなっている。	木のぬくもりが感じられる作りで、天井が高く開放感があります。地元のお祭りの写真や庭にやってきた蝶の写真が飾られており、玄関には季節の花が飾られ、水生生物が飼育されていて、自分の家のような安心感があります。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている。	気のあった者同士が過ごせるホールの他、所々にイスやソファを配置し、一人きりになれる居場所がある。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	本人のプライバシーを大切に、田舎暮らしの住み慣れた環境作りと、使い馴染みのある家具などを持ち込んでいただいて、安心して生活が送られるよう工夫している。	各部屋の入口には以前の屋号が掲げられており、自分の家のように出入りできます。居室には洗面台が設置されていて、手洗いや口腔ケアなどが快適に行えます。壁には家族の写真や似顔絵、感謝状があり、居心地の良い空間となっています。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している。	食堂兼居間はバリアフリーで広い空間となっており、一人ひとりが思い思いに過ごし、自立した生活が送れている。また、身だしなみが整えられるよう全室に鏡付きの洗面台が設置してある。		